

## CHAPTER 9

次の日の朝食前に、ハリーとロンは談話室でハーマイオニーに会った。

自分の説に支持がほしいと、ハリーは早速、ホグワーツ特急で盗み聞きしたマルフォイの言葉を話して聞かせた。

「だけど、あいつは当然パーキンソンにかっこつけただけだよな？」

ハーマイオニーが何も言わないうちに、ロンがすばやく口を挟んだ。

「そうねえ」ハーマイオニーが曖昧に答えた。

「わからないわ……自分を偉く見せたがるのはマルフォイらしいけど……でも嘘にしてはちょっと大きすぎるし……」

「そうだよ」

ハリーは相槌を打ったが、それ以上は押せなかった。

というのも、あまりにも大勢の生徒たちがハリーを見つめていたし、口に手を当ててひそひそ話をするばかりでなく、ハリーたちの会話に聞き耳を立てていたからだ。

「指差しは失礼だぞ」

三人で肖像画の穴から出ていく生徒の列に並びながら、ロンが特に細い一年生に噛みついた。

片手で口を覆って、ハリーのことを友達にヒソヒソ話していた男の子は、たちまちまっ赤になり、驚いた拍子に穴から転がり落ちた。ロンはニヤニヤ笑った。

「六年生になるって、いいなあ。それに、今年は自由時間があるぜ。まるまる空いている時間だ。ここに座ってのんびりしてればいい」

「その時間は勉強するのに必要なのよ、ロン！」

三人で廊下を歩きながら、ハーマイオニーが言った。

「ああ、だけど今日は違う」ロンが言った。

「今日は楽勝だと思うぜ」

「ちょっと！」

ハーマイオニーが腕を突き出して、通りがかりの四年生の男子を止めた。男の子は、ライムグリーンの円盤をしっかりとつかんで、急い

## Chapter 9

### The Half-Blood Prince

Harry and Ron met Hermione in the common room before breakfast next morning. Hoping for some support for his theory, Harry lost no time in telling Hermione what he had overheard Malfoy saying on the Hogwarts Express.

“But he was obviously showing off for Parkinson, wasn’t he?” interjected Ron quickly, before Hermione could say anything.

“Well,” she said uncertainly, “I don’t know. ... It would be like Malfoy to make himself seem more important than he is ... but that’s a big lie to tell. ...”

“Exactly,” said Harry, but he could not press the point, because so many people were trying to listen in to his conversation, not to mention staring at him and whispering behind their hands.

“It’s rude to point,” Ron snapped at a particularly minuscule first-year boy as they joined the queue to climb out of the portrait hole. The boy, who had been muttering something about Harry behind his hand to his friend, promptly turned scarlet and toppled out of the hole in alarm. Ron sniggered.

“I love being a sixth year. *And* we’re going to be getting free time this year. Whole periods when we can just sit up here and relax.”

“We’re going to need that time for studying, Ron!” said Hermione, as they set off down the corridor.

“Yeah, but not today,” said Ron. “Today’s going to be a real doss, I reckon.”

でハーマイオニーを追い抜こうとしていた。  
「『噛みつきフリスビー』は禁止されてるわ。よこしなさい」  
ハーマイオニーは厳しい口調で言った。  
しかめっ面の男の子は、歯をむき出しているフリスビーを渡し、ハーマイオニーの腕をくぐり抜けて友達のを追った。  
ロンはその姿が見えなくなるのを待って、ハーマイオニーの握りしめているフリスビーを引ったくった。  
「上出来。これほしかったんだ」  
ハーマイオニーが抗議する声は、大きなクスクス笑いに吞まれてしまった。  
ラベンダー・ブラウンだった。  
ロンの言い方がとてもおかしいと思ったらしく、笑いながら三人を追い越し、振り返ってロンをちらりと見た。  
ロンは、かなり得意げだった。  
大広間の天井は、高い格子窓で四角に切り取られて見える外の空と同じく、静かに青く澄み、淡い雲が霞のように流れていた。  
オートミールや卵、ベーコンを掻っ込みながら、ハリーとロンは、昨夜のハグリッドとのばつの悪い会話をハーマイオニーに話して聞かせた。  
「だけど、私たちが『魔法生物飼育学』を続けるなんて、ハグリッドったら、そんなこと、考えられるはずがないじゃない！」  
ハーマイオニーも気落ちした顔になった。  
「だって、私たち、いつそんな素振りを……あの……熱中ぶりを見せたかしら？」  
「まさに、そこだよ。だろ？」  
ロンは目玉焼きを丸ごと飲み込んだ。  
「授業でいちばん努力したのは僕たちだけど、ハグリッドが好きだからだよ。だけどハグリッドは、僕たちがあんなバカバカしい学科が好きだと思い込んでる。N・E・W・Tレベルで、あれを続けるやつがいると思うか？」  
ハリーもハーマイオニーも答えなかったし、答える必要はなかった。  
同学年で「魔法生物飼育学」を続ける学生が一人もいないことは、はっきりしていた。  
十分後に、ハグリッドが教職員テーブルを離れ際に陽気に手を振ったときも、三人はハグ

“Hold it!” said Hermione, throwing out an arm and halting a passing fourth year, who was attempting to push past her with a lime-green disk clutched tightly in his hand. “Fanged Frisbees are banned, hand it over,” she told him sternly. The scowling boy handed over the snarling Frisbee, ducked under her arm, and took off after his friends. Ron waited for him to vanish, then tugged the Frisbee from Hermione’s grip.

“Excellent, I’ve always wanted one of these.”

Hermione’s remonstrance was drowned by a loud giggle; Lavender Brown had apparently found Ron’s remark highly amusing. She continued to laugh as she passed them, glancing back at Ron over her shoulder. Ron looked rather pleased with himself.

The ceiling of the Great Hall was serenely blue and streaked with frail, wispy clouds, just like the squares of sky visible through the high mullioned windows. While they tucked into porridge and eggs and bacon, Harry and Ron told Hermione about their embarrassing conversation with Hagrid the previous evening.

“But he can’t really think we’d continue Care of Magical Creatures!” she said, looking distressed. “I mean, when has any of us expressed ... you know ... any enthusiasm?”

“That’s it, though, innit?” said Ron, swallowing an entire fried egg whole. “We were the ones who made the most effort in classes because we like Hagrid. But he thinks we liked the stupid *subject*. D’you reckon anyone’s going to go on to N.E.W.T.?”

Neither Harry nor Hermione answered; there was no need. They knew perfectly well that nobody in their year would want to continue Care of Magical Creatures. They

リッドと目を合わせず、中途半端に手を振り返した。

食事のあと、みんなその場にとどまり、マクゴナガル先生が、教職員テーブルから降り立つのを待った。

時間割を配る作業は、今年はこれまでより複雑だった。

マクゴナガル先生はまず最初に、それぞれが希望するN・E・W・Tの授業に必要とされる、O・W・Lの合格点が取れているかどうかを、確認する必要があった。

ハーマイオニーは、すぐにすべての授業の継続を許された。

呪文学、闇の魔術に対する防衛術、変身術、薬草学、数占い、古代ルーン文字、魔法薬学。

そして、一時間目の古代ルーン文字のクラスにさっさと飛んでいった。

ネビルは処理に少し時間がかかった。

マクゴナガル先生がネビルの申込書を読み、O・W・Lの成績を照らし合わせている間、ネビルの丸顔は心配そうだった。

「薬草学。結構」先生が言った。

「スプラウト先生は、あなたが。O・W・Lで『優・O』を取って授業に戻ることをお喜びになるでしょう。それから『闇の魔術に対する防衛術』は、期待以上の『良・E』で資格があります。ただ、問題は『変身術』です。気の毒ですがロングボトム、『可・A』ではN・E・W・Tレベルを続けるには十分ではありません。授業についていけないだろうと思います」

ネビルはうなだれた。

マクゴナガル先生は四角いメガネの奥からネビルをじっと見た。

「そもそもどうして『変身術』を続けたいのですか？ 私は、あなたが特に授業を楽しんでいるという印象を受けたことはありませんが」

ネビルは惨めな様子で、「ばあちゃんが望んでいます」のようなことを呟いた。

「フンッ」マクゴナガル先生が鼻を鳴らした。

「あなたのおばあさまは、どういう孫を持つべきかという考えでなく、あるがままの孫を

avoided Hagrid's eye and returned his cheery wave only halfheartedly when he left the staff table ten minutes later.

After they had eaten, they remained in their places, awaiting Professor McGonagall's descent from the staff table. The distribution of class schedules was more complicated than usual this year, for Professor McGonagall needed first to confirm that everybody had achieved the necessary O.W.L. grades to continue with their chosen N.E.W.T.s.

Hermione was immediately cleared to continue with Charms, Defense Against the Dark Arts, Transfiguration, Herbology, Arithmancy, Ancient Runes, and Potions, and shot off to a first-period Ancient Runes class without further ado. Neville took a little longer to sort out; his round face was anxious as Professor McGonagall looked down his application and then consulted his O.W.L. results.

"Herbology, fine," she said. "Professor Sprout will be delighted to see you back with an 'Outstanding' O.W.L. And you qualify for Defense Against the Dark Arts with 'Exceeds Expectations.' But the problem is Transfiguration. I'm sorry, Longbottom, but an 'Acceptable' really isn't good enough to continue to N.E.W.T level. I just don't think you'd be able to cope with the coursework."

Neville hung his head. Professor McGonagall peered at him through her square spectacles.

"Why do you want to continue with Transfiguration, anyway? I've never had the impression that you particularly enjoyed it."

Neville looked miserable and muttered something about "my grandmother wants."

"Hmph," snorted Professor McGonagall.

誇るべきだと気づいてもいいところです——特に魔法省での一件のあとは」

ネビルは顔をピンクに染め、まごついて目をパチクリさせた。

マクゴナガル先生は、これまで一度もネビルを褒めたことがなかった。

「残念ですが、ロングボトム、私はあなたをN・E・W・Tのクラスに入れることはできません。ただ、『呪文学』では『良・E』を取っていますね——『呪文学』のN・E・W・Tを取ったらどうですか？」

「ばあちゃんが、『呪文学』は軟弱な選択だと思っています」ネビルが呟いた。

「『呪文学』をお取りなさい」マクゴナガル先生が言った。

「私からオーガスタに一筆入れて、思い出してもらいましょう。白分が『呪文学』の。

O・W・Lに落ちたからといって、学科そのものが必ずしも価値がないとは言えません」信じられない、といううれしそうな表情を浮かべたネビルに、マクゴナガル先生はちょっと微笑みかけ、まっ白な時間割を杖先で叩いて、新しい授業の詳細が書き込まれた時間割を渡した。

マクゴナガル先生は、次にパーバティ・パチルに取りかかった。

パーバティの最初の質問は、ハンサムなケンタウルスのフィレンツェがまだ「占い学」を教えるかどうかだった。

「今年は、トレローニー先生と二人でクラスを分担します」

マクゴナガル先生は不満そうな声で言った。先生が、「占い学」という学科を蔑視しているのは周知のことだ。

「六年生はトレローニー先生が担当なさいます」

パーバティは五分後に、ちょっと打ち萎れて「占い学」の授業に出かけた。

「さあ、ポッター、ポッターっと……」

ハリーのほうを向きながら、マクゴナガル先生は自分のノートを調べていた。

「『呪文学』、『闇の魔術に対する防衛術』、『薬草学』、『変身術』……すべて結構です。あなたの『変身術』の成績には、ポッター、私自身満足しています。大変満足で

“It’s high time your grandmother learned to be proud of the grandson she’s got, rather than the one she thinks she ought to have — particularly after what happened at the Ministry.”

Neville turned very pink and blinked confusedly; Professor McGonagall had never paid him a compliment before.

“I’m sorry, Longbottom, but I cannot let you into my N.E.W.T. class. I see that you have an ‘Exceeds Expectations’ in Charms, however — why not try for a N.E.W.T. in Charms?”

“My grandmother thinks Charms is a soft option,” mumbled Neville.

“Take Charms,” said Professor McGonagall, “and I shall drop Augusta a line reminding her that just because she failed *her* Charms O.W.L., the subject is not necessarily worthless.” Smiling slightly at the look of delighted incredulity on Neville’s face, Professor McGonagall tapped a blank schedule with the tip of her wand and handed it, now carrying details of his new classes, to Neville.

Professor McGonagall turned next to Parvati Patil, whose first question was whether Firenze, the handsome centaur, was still teaching Divination.

“He and Professor Trelawney are dividing classes between them this year,” said Professor McGonagall, a hint of disapproval in her voice; it was common knowledge that she despised the subject of Divination. “The sixth year is being taken by Professor Trelawney.”

Parvati set off for Divination five minutes later looking slightly crestfallen.

“So, Potter, Potter …” said Professor McGonagall, consulting her notes as she turned

す。さて、なぜ『魔法薬学』を続ける申し込みをしなかったのですか？ 闇祓いになるのがあなたの志だったと思いますが？」

「そうでした。でも、先生は僕に、O・W・Lで『優・O』を取らないとだめだとおっしゃいました」

「たしかに、スネイプ先生が、この学科を教えていらっしゃる間はそうでした。しかし、スラグホーン先生は。O・W・Lで『良・E』の学生でも、喜んでN・E・W・Tに受け入れます。『魔法薬』に進みたいですか？」

「はい」ハリーが答えた。

「でも、教科書も材料も、何も買っていませんー」

「スラグホーン先生が、何か貸してくださると思います」マクゴナガル先生が言った。

「よろしい。ポッター、あなたの時間割です。ああ、ところでーグリフィンボールのクィディッチ・チームに、すでに二十人の候補者が名前を連ねています。追っつけあなたにリストを渡しますから、時間があるときに選抜の日を決めればよいでしょう」

しばらくして、ロンもハリーと同じ学科を許可され、二人は一緒にテーブルを離れた。

「どうだい」ロンが時間割を眺めてうれしそうに言った。

「僕たちいまが自由時間だぜ……それに休憩時間のあとに自由時間……それと昼食のあと……やったぜ！」二人は談話室に戻った。七年生が五、六人いるだけで、がらんとしていた。

ハリーが一年生でクィディッチ・チームに入ったときの、オリジナル・メンバーでただ一人残っているケイティ・ベルもそこにいた。

「君がそれをもらうだろうと思っていたわ。おめでとう」

ケイティはハリーの胸にあるキャプテン・バッジを指して、離れたところから声をかけた。

「いつ選抜するのか教えてよ！」

「バカなこと言うなよ」ハリーが言った。

「君は選抜なんか必要ない。五年間ずっと君のプレイを見てきたんだ」

「最初からそれじゃいけないな」

to Harry. “Charms, Defense Against the Dark Arts, Herbology, Transfiguration ... all fine. I must say, I was pleased with your Transfiguration mark, Potter, very pleased. Now, why haven't you applied to continue with Potions? I thought it was your ambition to become an Auror?”

“It was, but you told me I had to get an ‘Outstanding’ in my O.W.L., Professor.”

“And so you did when Professor Snape was teaching the subject. Professor Slughorn, however, is perfectly happy to accept N.E.W.T students with ‘Exceeds Expectations’ at O.W.L. Do you wish to proceed with Potions?”

“Yes,” said Harry, “but I didn't buy the books or any ingredients or anything —”

“I'm sure Professor Slughorn will be able to lend you some,” said Professor McGonagall. “Very well, Potter, here is your schedule. Oh, by the way — twenty hopefuls have already put down their names for the Gryffindor Quidditch team. I shall pass the list to you in due course and you can fix up trials at your leisure.”

A few minutes later, Ron was cleared to do the same subjects as Harry, and the two of them left the table together.

“Look,” said Ron delightedly, gazing at his schedule, “we've got a free period now ... and a free period after break ... and after lunch ... *excellent!*”

They returned to the common room, which was empty apart from a half dozen seventh years, including Katie Bell, the only remaining member of the original Gryffindor Quidditch team that Harry had joined in his first year.

“I thought you'd get that, well done,” she called over, pointing at the Captain's badge on

ケイティが警告するように言った。

「わたしよりずっと上手い人がいるかもしれないじゃない。これまでだって、キャプテンが古顔ばかり使ったり、友達を入れたりして、せっかくのいいチームをダメにした例はあるんだよ」

ロンはちょっとばつが悪そうな顔をして、ハーマイオニーが四年生から取り上げた「噛みつきフリスビー」で遊びはじめた。

フリスビーは、談話室を唸り声を上げて飛び回り、歯をむき出してタペストリーに噛みつくようにした。

クルックシャンクスの黄色い目がそのあとを追い、近くに飛んでくるとシャーッと威嚇した。

一時間後、二人は、しぶしぶ太陽が降り注ぐ談話室を離れ、四階下の「闇の魔術に対する防衛術」の教室に向かった。ハーマイオニーは重い本を腕一杯抱え、「理不尽だわ」という顔で、すでに教室の外に並んでいた。

「ルーン文字で宿題をいっぱい出されたの」ハリーとロンがそばに行くと、ハーマイオニーが不安げに言った。

「エッセイを四十センチ、翻訳が二つ、それにこれだけの本を水曜日までに読まなくちゃならないのよ！」

「ご愁傷様」ロンが欠伸をした。

「見てらっしゃい」ハーマイオニーが恨めしげに言った。

「スネイプもきっと山ほど出すわよ」

その言葉が終わらないうちに教室のドアが開き、スネイプが、いつものとおり、両開きのカーテンのようなねっとりした黒髪で縁取られた土気色の顔で、廊下に出てきた。

行列がたちまち、しーんとなった。

「中へ」スネイプが言った。

ハリーは、あたりを見回しながら入った。

スネイプはすでに、教室にスネイプらしい個性を持ち込んでいた。

窓にはカーテンが引かれていつもより陰気くさく、蠟燭で灯りを取っている。

壁に掛けられた新しい絵の多くは、身の毛もよだつ怪我や奇妙にねじ曲がった体の部分をさらして、痛み苦しむ人の姿だった。

薄暗い中で凄惨な絵を見回しながら、生徒た

Harry's chest. "Tell me when you call trials!"

"Don't be stupid," said Harry, "you don't need to try out, I've watched you play for five years. ..."

"You mustn't start off like that," she said warningly. "For all you know, there's someone much better than me out there. Good teams have been ruined before now because Captains just kept playing the old faces, or letting in their friends. ..."

Ron looked a little uncomfortable and began playing with the Fanged Frisbee Hermione had taken from the fourth-year student. It zoomed around the common room, snarling and attempting to take bites of the tapestry. Crookshanks's yellow eyes followed it and he hissed when it came too close.

An hour later they reluctantly left the sunlit common room for the Defense Against the Dark Arts classroom four floors below. Hermione was already queuing outside, carrying an armful of heavy books and looking put-upon.

"We got so much homework for Runes," she said anxiously, when Harry and Ron joined her. "A fifteen-inch essay, two translations, and I've got to read these by Wednesday!"

"Shame," yawned Ron.

"You wait," she said resentfully. "I bet Snape gives us loads."

The classroom door opened as she spoke, and Snape stepped into the corridor, his sallow face framed as ever by two curtains of greasy black hair. Silence fell over the queue immediately.

"Inside," he said.

Harry looked around as they entered. Snape had imposed his personality upon the room

ちは無言で席に着いた。

「我輩はまだ教科書を出せとは頼んでおらん」

ドアを閉め、生徒と向き合うため教壇の机に向かって歩きながら、スネイプが言った。ハーマイオニーは慌てて「顔のない顔に對面する」の教科書をカバンに戻し、椅子の下に置いた。

「我輩が話をする。十分傾聴するのだ」  
暗い目が、顔を上げている生徒たちの上を漂った。

ハリーの顔に、ほかの顔よりわずかに長く視線が止まった。

「我輩が思うに、これまで諸君はこの学科で五人の教師を持った」

「思う……スネイプめ、全員が次々といひなくなるのを見物しながら、今度こそ自分がその職に就きたいと思っていたくせに」

ハリーは心の中で痛烈に嘲った。

「当然、こうした教師たちは、それぞれ自分なりの方法と好みを持っていた。そうした混乱にもかかわらず、かくも多くの諸君が辛くもこの学科の。O・W・L合格点を取ったことに、我輩は驚いておる。N・E・W・Tはそれよりずっと高度であるからして、諸君が全員それについてくるようなことがあれば、我輩はさらに驚くであろう」

スネイプは、こんどは低い声で話しながら教室の端を歩きはじめ、クラス中が首を伸ばしてスネイプの姿を見失わないようにした。

「『闇の魔術』は」スネイプが言った。

「多種多様、千変万化、流動的にして永遠なるものだ。それと戦うということは、多くの頭を持つ怪物と戦うに等しい。首を一つ切り落としても別の首が、しかも前より獐猛で賢い首が生えてくる。諸君の戦いの相手は、固定できず、変化し、破壊不能なものだ」

ハリーはスネイプを凝視した。

危険な敵である「闇の魔術」を侮るべからずというのなら頷ける。

しかし、いまのスネイプのように、やさしく愛撫するような口調で語るのは、話が違いうだろう？

「諸君の防衛術は」スネイプの声がわずかに高くなった。

already; it was gloomier than usual, as curtains had been drawn over the windows, and was lit by candlelight. New pictures adorned the walls, many of them showing people who appeared to be in pain, sporting grisly injuries or strangely contorted body parts. Nobody spoke as they settled down, looking around at the shadowy, gruesome pictures.

“I have not asked you to take out your books,” said Snape, closing the door and moving to face the class from behind his desk; Hermione hastily dropped her copy of *Confronting the Faceless* back into her bag and stowed it under her chair. “I wish to speak to you, and I want your fullest attention.”

His black eyes roved over their upturned faces, lingering for a fraction of a second longer on Harry’s than anyone else’s.

“You have had five teachers in this subject so far, I believe.”

*You believe ... like you haven’t watched them all come and go, Snape, hoping you’d be next,* thought Harry scathingly.

“Naturally, these teachers will all have had their own methods and priorities. Given this confusion I am surprised so many of you scraped an O.W.L. in this subject. I shall be even more surprised if all of you manage to keep up with the N.E.W.T. work, which will be much more advanced.”

Snape set off around the edge of the room, speaking now in a lower voice; the class craned their necks to keep him in view.

“The Dark Arts,” said Snape, “are many, varied, ever-changing, and eternal. Fighting them is like fighting a many-headed monster, which, each time a neck is severed, sprouts a head even fiercer and cleverer than before. You are fighting that which is unfixed, mutating,

「それ故、諸君が破ろうとする相手の術と同じく、柔軟にして創意的でなければならぬ。これらの絵は」

絵の前を早足で通り過ぎながら、スネイプは何枚かを指差した。

「術にかかった者たちがどうなるかを正しく表現している。たとえば『磔の呪文』の苦しみ（スネイプの手は、明らかに苦痛に悲鳴を上げている魔女の絵を指していた）、『吸魂鬼のキス』の感覚（壁にぐったりと寄り掛かり、虚ろな目をしてうずくまる魔法使い）、『亡者』の攻撃を挑発した者（地上に血だらけの塊）」

「それじゃ、『亡者』が目撃されたんですか？」

パーパティ・パチルが甲高い声で聞いた。

「間違いないんですか？『あの人』がそれを使っているんですか？」

「『闇の帝王』は過去に『亡者』を使った」スネイプが言った。

「となれば、再びそれを使うかも知れぬと想定するのが賢明というものだ。さて……」スネイプは教室の後ろを回り込み、教壇の机に向かって教室の反対側の端を歩き出した。黒いマントを翻して歩くその姿を、クラス全員がまた目で追った。

「……諸君は、我輩の見るところ、無言呪文の使用に関してはずぶの素人だ。無言呪文の利点は何か？」

ハーマイオニーの手がさっと挙がった。

スネイプはほかの生徒を見渡すのに時間をかけたが、選択の余地がないことを確認してからやっと、ぶっきらぼうに言った。

「それでは——ミス・グレンジャー？」

「こちらがどんな魔法をかけようとしているかについて、敵対者に何の警告も発しないことです」

ハーマイオニーが答えた。

「それが、一瞬の先手を取るという利点になります」

「『基本呪文集・六学年用』と、一字一句違わぬ丸写しの答えだ」

スネイプが素っ気なく言った（隅にいたマルフォイがせせら笑った）。

「しかし、概ね正解だ。左様。呪文を声高に

indestructible.”

Harry stared at Snape. It was surely one thing to respect the Dark Arts as a dangerous enemy, another to speak of them, as Snape was doing, with a loving caress in his voice?

“Your defenses,” said Snape, a little louder, “must therefore be as flexible and inventive as the arts you seek to undo. These pictures” — he indicated a few of them as he swept past — “give a fair representation of what happens to those who suffer, for instance, the Cruciatus Curse” — he waved a hand toward a witch who was clearly shrieking in agony — “feel the Dementor’s Kiss” — a wizard lying huddled and blank-eyed, slumped against a wall — “or provoke the aggression of the Inferius” — a bloody mass upon the ground.

“Has an Inferius been seen, then?” said Parvati Patil in a high-pitched voice. “Is it definite, is he using them?”

“The Dark Lord has used Inferi in the past,” said Snape, “which means you would be well-advised to assume he might use them again. Now ...”

He set off again around the other side of the classroom toward his desk, and again, they watched him as he walked, his dark robes billowing behind him.

“... you are, I believe, complete novices in the use of nonverbal spells. What is the advantage of a nonverbal spell?”

Hermione’s hand shot into the air. Snape took his time looking around at everybody else, making sure he had no choice, before saying curtly, “Very well — Miss Granger?”

“Your adversary has no warning about what kind of magic you’re about to perform,” said Hermione, “which gives you a split-second



唱えることなく魔法を使う段階に進んだ者は、呪文をかける際、驚きという要素の利点を得る。言うまでもなく、すべての魔法使いが使える術ではない。集中力と意思力の問題であり、こうした力は、諸君の何人かに――」

スネイプは再び、悪意に満ちた視線をハリーに向けた。

「欠如している」

スネイプが、先学年の惨憶たる「閉心術」の授業のことを念頭に置いているのはわかっていた。

ハリーは意地でもその視線をはずすまいと、スネイプを睨みつけ、やがてスネイプが視線をはずした。

「これから諸君は」スネイプが言葉を続けた。

「二人一組になる。一人が無言で相手に呪いをかけようとする。相手も同じく無言でその呪いを撥ね返そうとする。始めたまえ」

スネイプは知らないのだが、ハリーは先学年、このクラスの半数に（D Aのメンバーだった者全員に）「盾の呪文」を教えた。

しかし、無言で呪文をかけたことがある者は一人としていない。

しばらくすると、当然のごまかしが始まり、声を出して呪文を唱える代わりに、囁くだけの生徒がたくさんいた。

十分後には、例によってハーマイオニーが、ネビルの呟く「くらげ足の呪い」を一言も発せずには撥ね返すのに成功した。

まっとうな先生なら、グリフィンドールに二十点を与えただろうと思われる見事な成果なのに――ハリーは悔しかったが、スネイプは知らぬふりだ。

相変わらず育ちすぎたコウモリそのものの姿で、生徒が練習する間をバサーッと動き回り、課題に苦勞しているハリーとロンを、立ち止まって眺めた。

ハリーに呪いをかけるはずのロンは、呪文をブツブツ唱えたいのをこらえて唇を固く結び、顔を紫色にしていた。ハリーは呪文を撥ね返そうと杖を構え、永久にかかってきそうもない呪いを、やきもきと待ち構えていた。

「なっとらんな、ウィーズリー」しばらくし

advantage.”

“An answer copied almost word for word from *The Standard Book of Spells, Grade Six*,” said Snape dismissively (over in the corner, Malfoy sniggered), “but correct in essentials. Yes, those who progress to using magic without shouting incantations gain an element of surprise in their spell-casting. Not all wizards can do this, of course; it is a question of concentration and mind power which some” — his gaze lingered maliciously upon Harry once more — “lack.”

Harry knew Snape was thinking of their disastrous Occlumency lessons of the previous year. He refused to drop his gaze, but glowered at Snape until Snape looked away.

“You will now divide,” Snape went on, “into pairs. One partner will attempt to jinx the other *without speaking*. The other will attempt to repel the jinx *in equal silence*. Carry on.”

Although Snape did not know it, Harry had taught at least half the class (everyone who had been a member of the D.A.) how to perform a Shield Charm the previous year. None of them had ever cast the charm without speaking, however. A reasonable amount of cheating ensued; many people were merely whispering the incantation instead of saying it aloud. Typically, ten minutes into the lesson Hermione managed to repel Neville’s muttered Jelly-Legs Jinx without uttering a single word, a feat that would surely have earned her twenty points for Gryffindor from any reasonable teacher, thought Harry bitterly, but which Snape ignored. He swept between them as they practiced, looking just as much like an overgrown bat as ever, lingering to watch Harry and Ron struggling with the task.

Ron, who was supposed to be jinxing Harry, was purple in the face, his lips tightly

てスネイプが言った。

「どれ……我輩が手本をー」

スネイプがあまりにすばやく杖をハリーに向けたので、ハリーは本能的に反応した。無言呪文など頭から吹っ飛び、ハリーは叫んだ。

「プロテゴ！＜譲れ＞」

「盾の呪文」があまりに強烈で、スネイプはバランスを崩して机にぶつかった。クラス中が振り返り、スネイプが陰悪な顔で体勢を立て直すのを見つめた。

「我輩が無言呪文を練習するように言ったのを、憶えているのか、ポッター？」

「はい」ハリーは突っぱった。

「はい、先生」

「僕に『先生』なんて敬語をつけていただく必要はありません。先生」

自分が何を言っているか考える間もなく、言葉が口を衝いて出ていた。

ハーマイオニーを含む何人かが息を呑んだ。しかし、スネイプの背後では、ロン、ディーナ、シェーマスがよくぞ言ったとばかりニヤリと笑った。

「罰則。土曜の夜。我輩の部屋」スネイプが言った。

「何人たりとも、我輩に向かって生意気な態度は許さんぞ、ポッター……たとえ『選ばれし者』であってもだ」

「あれはよかったぜ、ハリー！」

それからしばらくして、休憩時間に入り、安全な場所まで来ると、ロンがうれしそうに高笑いした。

「あんなこと言うべきじゃなかったわ」ハーマイオニーは、ロンを睨みながら言った。

「どうして言ったの？」

「あいつは僕に呪いをかけようとしたんだ。もし気づいてなかったのなら言うけど！」ハリーは、いきりたって言った。

「僕は『閉心術』の授業で、そういうのを嫌というほど経験したんだ！たまにはほかのモルモットを使ったらいいじゃないか？ だいたいダンブルドアは何をやってるんだ？ あいつが『防衛術』を教えさせるなんて！ あいつが『闇の魔術』のことをどんなふう話すか聞

compressed to save himself from the temptation of muttering the incantation. Harry had his wand raised, waiting on tenterhooks to repel a jinx that seemed unlikely ever to come.

“Pathetic, Weasley,” said Snape, after a while. “Here — let me show you —”

He turned his wand on Harry so fast that Harry reacted instinctively; all thought of nonverbal spells forgotten, he yelled, “*Protego!*”

His Shield Charm was so strong Snape was knocked off-balance and hit a desk. The whole class had looked around and now watched as Snape righted himself, scowling.

“Do you remember me telling you we are practicing *nonverbal* spells, Potter?”

“Yes,” said Harry stiffly.

“Yes, *sir*.”

“There’s no need to call me ‘sir,’ Professor.”

The words had escaped him before he knew what he was saying. Several people gasped, including Hermione. Behind Snape, however, Ron, Dean, and Seamus grinned appreciatively.

“Detention, Saturday night, my office,” said Snape. “I do not take cheek from anyone, Potter ... not even ‘*the Chosen One*.’ ”

“That was brilliant, Harry!” chortled Ron, once they were safely on their way to break a short while later.

“You really shouldn’t have said it,” said Hermione, frowning at Ron. “What made you?”

“He tried to jinx me, in case you didn’t notice!” fumed Harry. “I had enough of that during those Occlumency lessons! Why doesn’t he use another guinea pig for a change?

いたか？ あいつは『闇の魔術』に恋してるんだ！ 『千変万化、破壊不能』とか何とかー

ー」  
「でも」 ハーマイオニーが言った。

「私は、なんだかあなたみたいなことを言ってるなと思ったわ」

「僕みたいな？」

「ええ。ヴォルデモートと対決するのはどんな感じかって、私たちに話してくれたときだけど。あなたはこう言ったわ。『呪文をごっそり覚えるのとは違う、たった一人で、自分の頭と肝っ玉だけしかないんだ』ってーそれ、スネイプが言っていたことじゃない？ 結局は勇気とすばやい思考だってこと」

ハーマイオニーが自分の言葉をまるで「基本呪文集」と同じように暗記する価値があると思っていてくれたことで、ハリーはすっかり毒気を抜かれ、反論もしなかったし、一瞬にして頬が紅潮するのを止められなかった。

「ハリー、よう、ハリー！」

振り返るとジャック・スローパーだった。

前年度のグリフィンドール・クィディッチ・チームのピーターの一人だ。

羊皮紙の巻紙を持って急いでやってくる。

「君宛だ」スローパーは息を切らしながら言った。

「おい、君が新しいキャプテンだって聞いたけど、選抜はいつだ？」

「まだはっきりしない」

スローパーがチームに戻れたら、それこそ幸運というものだ、とハリーは内心そう思った。

「知らせるよ」

「ああ、そうかあ。今週の週末だといいなと思ったんだけどー」ハリーは聞いてもいなかった。

羊皮紙に書かれた細長い斜め文字には見覚えがあった。

まだ言い終わっていないスローパーを置き去りにして、ハリーは羊皮紙を開きながら、ロンとハーマイオニーと一緒に急いで歩き出した。

親愛なるハリー

What's Dumbledore playing at, anyway, letting him teach Defense? Did you hear him talking about the Dark Arts? He loves them! All that *unfixed, indestructible* stuff —”

“Well,” said Hermione, “I thought he sounded a bit like you.”

“Like me?”

“Yes, when you were telling us what it's like to face Voldemort. You said it wasn't just memorizing a bunch of spells, you said it was just you and your brains and your guts — well, wasn't that what Snape was saying? That it really comes down to being brave and quick-thinking?”

Harry was so disarmed that she had thought his words as well worth memorizing as *The Standard Book of Spells* that he did not argue.

“Harry! Hey, Harry!”

Harry looked around; Jack Sloper, one of the Beaters on last year's Gryffindor Quidditch team, was hurrying toward him holding a roll of parchment.

“For you,” panted Sloper. “Listen, I heard you're the new Captain. When're you holding trials?”

“I'm not sure yet,” said Harry, thinking privately that Sloper would be very lucky to get back on the team. “I'll let you know.”

“Oh, right. I was hoping it'd be this weekend —”

But Harry was not listening; he had just recognized the thin, slanting writing on the parchment. Leaving Sloper in mid-sentence, he hurried away with Ron and Hermione, unrolling the parchment as he went.

土曜日に個人教授を初めたいと思う。午後八時にわしの部屋にお越し願いたい。

今学期最初の日をきみが楽しく過ごしていることを願っている。

敬具

アルバス・ダンブルドア

追伸 わしは「ペロペロ酸飴」が好きじゃ

「『ペロペロ酸飴』が好きだって？」  
ハリーの肩越しに手紙を覗き込んでいたロンが、わけがわからないという顔をした。

「校長室の外にいる、ガーゴイルを通過するための合言葉なんだ」ハリーが声を落とした。

「ヘンッ！ スネイプはおもしろくないぞ……僕の罰則がふいになる！」

休憩の間中、ハリー、ロン、ハーマイオニーは、ダンブルドアがハリーに何を教えるのだろうと推測し合った。

ロンは、死喰い人が知らないような、ものすごい呪いとか呪詛である可能性が高いと言った。

ハーマイオニーはそういうものは非合法だと言い、むしろダンブルドアは、ハリーに高度な防衛術を教えたがっているのだろうと言った。

休憩の後、ハーマイオニーは「数占い」に出かけ、ハリーとロンは談話室に戻って、嫌々ながらスネイプの宿題に取りかかった。

それがあまりにも複雑で、昼食後の自由時間にハーマイオニーが二人のところに来たときにも、まだ終わっていなかった（もっとも、ハーマイオニーのおかげで、宿題の進み具合が相当早まった）。

午後の授業開始のベルが鳴ったときに、やっと二人は宿題を終えた。

三人は二時限続きの魔法薬学の授業を受け、これまで長いことスネイプの教室だった地下牢教室に向かって、通い慣れた通路を下りていった。

教室の前に並んで見回すと、N・E・W・Tレベルに進んだ生徒はたった十二人しかいなかった。

クラブとゴイルが、O・W・Lの合格点を

*Dear Harry,*

*I would like to start our private lessons this Saturday. Kindly come along to my office at 8 p.m. I hope you are enjoying your first day back at school.*

*Yours sincerely,*

*Albus Dumbledore*

*P.S. I enjoy Acid Pops.*

“He enjoys Acid Pops?” said Ron, who had read the message over Harry’s shoulder and was looking perplexed.

“It’s the password to get past the gargoyle outside his study,” said Harry in a low voice. “Ha! Snape’s not going to be pleased. ... I won’t be able to do his detention!”

He, Ron, and Hermione spent the whole of break speculating on what Dumbledore would teach Harry. Ron thought it most likely to be spectacular jinxes and hexes of the type the Death Eaters would not know. Hermione said such things were illegal, and thought it much more likely that Dumbledore wanted to teach Harry advanced Defensive magic. After break, she went off to Arithmancy while Harry and Ron returned to the common room, where they grudgingly started Snape’s homework. This turned out to be so complex that they still had not finished when Hermione joined them for their after-lunch free period (though she considerably speeded up the process). They had only just finished when the bell rang for the afternoon’s double Potions and they beat the familiar path down to the dungeon classroom that had, for so long, been Snape’s.

When they arrived in the corridor they saw that there were only a dozen people progressing to N.E.W.T. level. Crabbe and

取れなかったのは明らかだったが、スリザリンからはマルフォイを含む四人が残っていた。

レイブンクローから四人、ハッフルパフからはアーニー・マクミランが一人だった。

アーニーは気取ったところがあるが、ハリーは好きだった。

「ハリー」

ハリーが近づくと、アーニーはもったいぶって手を差し出した。

「今朝は『闇の魔術に対する防衛術』で声をかける機会がなくて。僕はいい授業だと思ったね。もっとも、『盾の呪文』なんかは、かのD A常習犯である我々にとっては、むしろ旧聞に属する呪文だけど……やあ、ロン、元気ですか——ハーマイオニーは？」

二人が「元気」までしか言い終わらないうちに、地下牢の扉が開き、スラグホーンが腹を先にして教室から出て来た。

生徒が列をなして教室に入るのを迎えながら、スラグホーンはニッコリ笑い、巨大なセイウチ髭もその上でニッコリの形になっていた。

ハリーとザビニに対して、スラグホーンは特別に熱い挨拶をした。

地下牢は常日頃と違って、すでに蒸気や風変わりな臭気に満ちていた。

ハリー、ロン、ハーマイオニーは、グツグツ煮え立ついくつもの大鍋のそばを通り過ぎながら、何だろうと鼻をヒクヒクさせた。

スリザリン生四人が、一つのテーブルを取り、レイブンクロー生も同様にした。残ったハリー、ロン、ハーマイオニーとアーニーは、一緒にテーブルに着くことになった。四人は金色の大鍋にいちばん近いテーブルを選んだ。

この鍋は、ハリーがいままでに嗅いだ中でももっとも蟲惑的な香りの一つを発散していた。

なぜかその香りは、糖蜜パイや箒の柄のウッディな匂い、そして「隠れ穴」で嗅いだのではないかと思われる、花のような芳香を同時に思い起こさせた。

ハリーは知らぬ間にその香りをゆっくりと深く吸い込み、香りを呑んだかのように、自分

Goyle had evidently failed to achieve the required O.W.L. grade, but four Slytherins had made it through, including Malfoy. Four Ravenclaws were there, and one Hufflepuff, Ernie Macmillan, whom Harry liked despite his rather pompous manner.

“Harry,” Ernie said portentously, holding out his hand as Harry approached, “didn’t get a chance to speak in Defense Against the Dark Arts this morning. Good lesson, I thought, but Shield Charms are old hat, of course, for us old D.A. lags ... And how are you, Ron — Hermione?”

Before they could say more than “fine,” the dungeon door opened and Slughorn’s belly preceded him out of the door. As they filed into the room, his great walrus mustache curved above his beaming mouth, and he greeted Harry and Zabini with particular enthusiasm.

The dungeon was, most unusually, already full of vapors and odd smells. Harry, Ron, and Hermione sniffed interestedly as they passed large, bubbling cauldrons. The four Slytherins took a table together, as did the four Ravenclaws. This left Harry, Ron, and Hermione to share a table with Ernie. They chose the one nearest a gold-colored cauldron that was emitting one of the most seductive scents Harry had ever inhaled: Somehow it reminded him simultaneously of treacle tart, the woody smell of a broomstick handle, and something flowery he thought he might have smelled at the Burrow. He found that he was breathing very slowly and deeply and that the potion’s fumes seemed to be filling him up like drink. A great contentment stole over him; he grinned across at Ron, who grinned back lazily.

“Now then, now then, now then,” said

が薬の香気に満たされているのを感じた。いつの間にかハリーは大きな満足感に包まれ、ロンに向かって笑いかけた。ロンものんびりと笑いを返した。「さて、さて、さーてと」スラグホーンが言った。巨大な塊のような姿が、いく筋も立ち昇る湯気の向こうでユラユラ揺れて見えた。「みんな、秤を出して。魔法薬キットもだよ。それに『上級魔法薬』の……」「先生？」ハリーが手を挙げた。「ハリー、どうしたのかね？」「僕は本も秤も何も持っていませんーロンもですー僕たちN・E・W・Tが取れるとは思わなかったものですから、あのー」「ああ、そうそう。マクゴナガル先生がたしかにそうおっしゃっていた……心配には及ばんよ、ハリー、まったく心配ない。今日は貯蔵棚にある材料を使うといい。秤も問題なく貸してあげられるし、教科書も古いのが何冊か残っている。フローリッシュ・アンド・プロッツに手紙で注文するまでは、それで間に合うだろう……」スラグホーンは隅の戸棚にズンズン歩いていき、中をガザガザやっていたが、やがて、だいぶくたびれた感じのリバナウス・ボラージ著「上級魔法薬」を二冊引っぱり出した。スラグホーンは、黒ずんだ秤と一緒にその教科書を、ハリーとロンに渡した。「さーてと」スラグホーンは教室の前に戻り、もともと膨れている胸をさらに膨らませた。ベストのボタンが弾け飛びそうだ。「みんなに見せようと思って、いくつか魔法薬を煎じておいた。ちょっとおもしろいと思ったのでね。N・E・W・Tを終えたときには、こういうものを煎じることができるようになってははずだ。まだ調合したことがなくとも、名前ぐらい聞いたことがあるはずだ。これが何だか、わかる者はおるかね？」スラグホーンは、スリザリンのテーブルにいちばん近い大鍋を指した。ハリーが椅子からちょっと腰を浮かして見ると、単純に湯が沸いているように見えた。挙げる修練を十分に積んでいるハーマイオニ

Slughorn, whose massive outline was quivering through the many shimmering vapors. “Scales out, everyone, and potion kits, and don’t forget your copies of *Advanced Potion-Making*. …”

“Sir?” said Harry, raising his hand.

“Harry, m’boy?”

“I haven’t got a book or scales or anything — nor’s Ron — we didn’t realize we’d be able to do the N.E.W.T., you see —”

“Ah, yes, Professor McGonagall did mention … not to worry, my dear boy, not to worry at all. You can use ingredients from the store cupboard today, and I’m sure we can lend you some scales, and we’ve got a small stock of old books here, they’ll do until you can write to Flourish and Blotts. …”

Slughorn strode over to a corner cupboard and, after a moment’s foraging, emerged with two very battered-looking copies of *Advanced Potion-Making* by Libatius Borage, which he gave to Harry and Ron along with two sets of tarnished scales.

“Now then,” said Slughorn, returning to the front of the class and inflating his already bulging chest so that the buttons on his waistcoat threatened to burst off, “I’ve prepared a few potions for you to have a look at, just out of interest, you know. These are the kind of thing you ought to be able to make after completing your N.E.W.T.s. You ought to have heard of ’em, even if you haven’t made ’em yet. Anyone tell me what this one is?”

He indicated the cauldron nearest the Slytherin table. Harry raised himself slightly in his seat and saw what looked like plain water boiling away inside it.

一の手が、まっ先に天を突いた。  
スラグホーンはハーマイオニーを指した。  
「『真実薬』です。無色無臭で、飲んだ者に無理やり真実を話させます」ハーマイオニーが答えた。  
「大変よろしい、大変よろしい！」スラグホーンがうれしそうに言った。  
「さて」スラグホーンがレイブンクローのテーブルに近い大鍋を指した。  
「ここにあるこれは、かなりよく知られている……最近、魔法省のパンフレットにも特記されていたり…誰か……？」またしてもハーマイオニーの手がいちばん早かった。  
「はい先生、ポリジュース薬です」  
ハリーだって、二番目の大鍋でゆっくりとグツグツ煮えている、泥のようなものが何かはわかっていた。  
しかし、ハーマイオニーがその質問に答えるという手柄を立てても恨みには思わなかった。  
二年生のときにあの薬を煎じるのに成功したのは、結局ハーマイオニーだったのだから。  
「よろしい、よろしい！ さて、こっちだが… …おやおや？」  
ハーマイオニーの手がまた天を突いたので、スラグホーンはちょっと面食らった顔をした。  
「アモルテンシア、魅惑万能薬！」  
「そのとおり。聞くのはむしろ野暮だと言えるだろうが」  
スラグホーンは大いに感心した顔で言った。  
「どういう効能があるかを知っているだろうね？」  
「世界一強力な愛の妙薬です」ハーマイオニーが答えた。  
「正解だ！ 察するに、真珠貝のような独特の光沢でわかったのだろうね？」  
「それに、湯気が独特の螺旋を描いています」ハーマイオニーが熱っぽく言った。  
「そして、何に惹かれるかによって、一人ひとり違った匂いがします。私には刈ったばかりの芝生や新しい羊皮紙やー」  
しかし、ハーマイオニーはちょっと頬を染め、最後までは言わなかった。  
「君のお名前を聞いてもいいかね？」

Hermione's well-practiced hand hit the air before anybody else's; Slughorn pointed at her.

"It's Veritaserum, a colorless, odorless potion that forces the drinker to tell the truth," said Hermione.

"Very good, very good!" said Slughorn happily. "Now," he continued, pointing at the cauldron nearest the Ravenclaw table, "this one here is pretty well known. ... Featured in a few Ministry leaflets lately too ... Who can — ?"

Hermione's hand was fastest once more.

"It's Polyjuice Potion, sir," she said.

Harry too had recognized the slow-bubbling, mudlike substance in the second cauldron, but did not resent Hermione getting the credit for answering the question; she, after all, was the one who had succeeded in making it, back in their second year.

"Excellent, excellent! Now, this one here ... yes, my dear?" said Slughorn, now looking slightly bemused, as Hermione's hand punched the air again.

"It's Amortentia!"

"It is indeed. It seems almost foolish to ask," said Slughorn, who was looking mightily impressed, "but I assume you know what it does?"

"It's the most powerful love potion in the world!" said Hermione.

"Quite right! You recognized it, I suppose, by its distinctive mother-of-pearl sheen?"

"And the steam rising in characteristic spirals," said Hermione enthusiastically, "and it's supposed to smell differently to each of us, according to what attracts us, and I can smell freshly mown grass and new parchment and —"

ハーマイオニーがどぎまぎしているのは無視して、スラグホーンが尋ねた。

「ハーマイオニー・グレンジャーです。先生」

「グレンジャー？ グレンジャー？ ひょっとして、ヘクター・ダグワース・グレンジャーと関係はないかな？ 超一流魔法薬師協会の設立者だが？」

「いいえ、ないと思います。私はマグル生まれですから」

マルフォイがノットのほうに体を傾けて、何か小声で言うのをハリーは見た。

二人ともせせら笑っている。

しかしスラグホーンはまったくうろたえる様子もなく、逆にニッコリ笑って、ハーマイオニーと隣にいるハリーとを交互に見た。

「ほっほう！ 『僕の友達の一人もマグル生まれです。しかもその人は学年で一番です！』。察するところ、この人が、ハリー、まさに君の言っていた友達だね？」

「そうです、先生」ハリーが言った。

「さあ、さあ、ミス・グレンジャー、あなたがしっかり獲得した二十点を、グリフィンドールに差し上げよう」

スラグホーンが愛想よく言った。

マルフォイは、かつてハーマイオニーに顔面パンチを食らったときのような表情をした。ハーマイオニーは顔を輝かせてハリーを振り向き、小声で言った。

「本当にそう言ったの？ 私が学年で一番だって？ まあ、ハリー！」

「でもさ、そんなに感激することか？」

ロンはなぜか気分を害した様子で、小声で言った。

「君はほんとに学年で一番だしー先生が僕に聞いてたら、僕だってそう言ったぜ！」

ハーマイオニーは微笑んだが、「シーッ」という動作をした。

スラグホーンが何か言おうとしていたからだ。

ロンはちょっとふて腐れた。

「『魅惑万能薬』はもちろん、実際に愛を創り出すわけではない。愛を創ったり模倣したりすることは不可能だ。それはできない。この教室にある魔法薬の中では、この薬は単に

But she turned slightly pink and did not complete the sentence.

“May I ask your name, my dear?” said Slughorn, ignoring Hermione’s embarrassment.

“Hermione Granger, sir.”

“Granger? Granger? Can you possibly be related to Hector Dagworth-Granger, who founded the Most Extraordinary Society of Potioneers?”

“No, I don’t think so, sir. I’m Muggle-born, you see.”

Harry saw Malfoy lean close to Nott and whisper something; both of them sniggered, but Slughorn showed no dismay; on the contrary, he beamed and looked from Hermione to Harry, who was sitting next to her.

“Oho! ‘One of my best friends is Muggle-born, and she’s the best in our year!’ I’m assuming this is the very friend of whom you spoke, Harry?”

“Yes, sir,” said Harry.

“Well, well, take twenty well-earned points for Gryffindor, Miss Granger,” said Slughorn genially.

Malfoy looked rather as he had done the time Hermione had punched him in the face. Hermione turned to Harry with a radiant expression and whispered, “Did you really tell him I’m the best in the year? Oh, Harry!”

“Well, what’s so impressive about that?” whispered Ron, who for some reason looked annoyed. “You *are* the best in the year — I’d’ve told him so if he’d asked me!”

Hermione smiled but made a “shhing” gesture, so that they could hear what Slughorn



強烈な執着心、または強迫観念を引き起こす。おそらくいちばん危険で強力な薬だろう——ああ、そうだと」

スラグホーンは、小バカにしたようにせせら笑っているマルフォイとノットに向かって重々しく頷いた。

「わたしぐらい良く人生を見てくれば、妄執的な愛の恐ろしさを侮らないものだ……」

「さてそれでは」スラグホーンが言った。

「実習を始めよう」

「先生、これが何かを、まだ教えてくださっていません」

アーニー・マクミランが、スラグホーンの机に置いてある小さな黒い銅を指しながら言った。

中の魔法薬が、楽しげにピチャピチャ跳ねている。

金を溶かしたような色で、表面から金魚が跳び上がるようにしぶきが撥ねているのに、一滴もこぼれてはいなかった。

「ほっほう」

口癖が出た。スラグホーンは、この薬を忘れていたわけではなく、劇的な効果を狙って、誰かが質問するのを待っていた。そうに違いないとハリーは思った。

「そう。これね。さて、これこそは、紳士淑女諸君、もっとも興味深い、ひと癖ある魔法薬で、フェリックス・フェリシスと言う。きっと」

スラグホーンは微笑みながら、アッと声を上げて息を呑んだハーマイオニーを見た。

「君は、フェリックス・フェリシスが何かを知っているね？ ミス・グレンジャー？」

「幸運の液体です」ハーマイオニーが興奮気味に言った。

「人に幸運をもたらします！」

クラス中が背筋を正したようだった。

マルフォイもついに、スラグホーンに全神経を集中させたらしく、ハリーのところからは滑らかなブロンドの髪の後頭部しか見えなくなった。

「そのとおり。グリフィンドールにもう十点あげよう。そう。この魔法薬はちょっとおもしろい。フェリックス・フェリシスはね」スラグホーンが言った。

was saying. Ron looked slightly disgruntled.

“Amortentia doesn’t really create *love*, of course. It is impossible to manufacture or imitate love. No, this will simply cause a powerful infatuation or obsession. It is probably the most dangerous and powerful potion in this room — oh yes,” he said, nodding gravely at Malfoy and Nott, both of whom were smirking skeptically. “When you have seen as much of life as I have, you will not underestimate the power of obsessive love. ...

“And now,” said Slughorn, “it is time for us to start work.”

“Sir, you haven’t told us what’s in this one,” said Ernie Macmillan, pointing at a small black cauldron standing on Slughorn’s desk. The potion within was splashing about merrily; it was the color of molten gold, and large drops were leaping like goldfish above the surface, though not a particle had spilled.

“Oho,” said Slughorn again. Harry was sure that Slughorn had not forgotten the potion at all, but had waited to be asked for dramatic effect. “Yes. That. Well, *that* one, ladies and gentlemen, is a most curious little potion called Felix Felicis. I take it,” he turned, smiling, to look at Hermione, who had let out an audible gasp, “that you know what Felix Felicis does, Miss Granger?”

“It’s liquid luck,” said Hermione excitedly. “It makes you lucky!”

The whole class seemed to sit up a little straighten Now all Harry could see of Malfoy was the back of his sleek blond head, because he was at last giving Slughorn his full and undivided attention.

“Quite right, take another ten points for Gryffindor. Yes, it’s a funny little potion, Felix

「調合が恐ろしく面倒で、間違えると惨憺たる結果になる。しかし、正しく煎じれば、ここにあるのがそうだが、すべての企てが成功に傾いていくのがわかるだろう……少なくとも薬効が切れるまでは」

「先生、どうしてみんな、しょっちゅう飲まないんですか？」

テリー・ブートが勢い込んで聞いた。

「それは、飲みすぎると有頂天になったり、無謀になったり、危険な自己過信に陥るからだ」

スラグホーンが答えた。

「過ぎたるは尚、ということだな……大量に摂取すれば毒性が高い。しかし、ちびちびと、ほんのときどきなら……」

「先生は飲んだことがあるんですか？」マイケル・コーナーが興味津々で聞いた。

「二度ある」スラグホーンが言った。

「二十四歳のときに一度、五十七歳のときにも一度。朝食と一緒に大さじ二杯だ。完全無欠な二日だった」

スラグホーンは、夢見るように遠くを見つめた。

演技しているのだとしても——と、ハリーは思った——効果は抜群だった。

「そしてこれを」

スラグホーンは、現実に戻されたような雰囲気と言った。

「今日の授業の褒美として提供する」

しんとなった。

周りの魔法薬がグググッ、ブツブツという音がいっせいに十倍になったようだった。

「フェリックス・フェリシスの小瓶一本」

スラグホーンはコルク栓をした小さなガラス瓶をポケットから取り出して全員に見せた。

「十二時間分の幸運に十分な量だ。明け方から夕暮れまで、何をやってもラッキーになる」

「さて、警告しておくが、フェリックス・フェリシスは組織的な競技や競争事では禁止されている……たとえばスポーツ競技、試験や選挙などだ。これを獲得した生徒は、通常の日だけに使用すること……そして通常の日がどんなに異常にすばらしくなるかを御覧じろ！」

Felicitis,” said Slughorn. “Desperately tricky to make, and disastrous to get wrong. However, if brewed correctly, as this has been, you will find that all your endeavors tend to succeed ... at least until the effects wear off.”

“Why don’t people drink it all the time, sir?” said Terry Boot eagerly.

“Because if taken in excess, it causes giddiness, recklessness, and dangerous overconfidence,” said Slughorn. “Too much of a good thing, you know ... highly toxic in large quantities. But taken sparingly, and very occasionally ...”

“Have you ever taken it, sir?” asked Michael Corner with great interest.

“Twice in my life,” said Slughorn. “Once when I was twenty-four, once when I was fifty-seven. Two tablespoonfuls taken with breakfast. Two perfect days.”

He gazed dreamily into the distance. Whether he was playacting or not, thought Harry, the effect was good.

“And that,” said Slughorn, apparently coming back to earth, “is what I shall be offering as a prize in this lesson.”

There was silence in which every bubble and gurgle of the surrounding potions seemed magnified tenfold.

“One tiny bottle of Felix Felicis,” said Slughorn, taking a minuscule glass bottle with a cork in it out of his pocket and showing it to them all. “Enough for twelve hours’ luck. From dawn till dusk, you will be lucky in everything you attempt.

“Now, I must give you warning that Felix Felicis is a banned substance in organized competitions ... sporting events, for instance, examinations, or elections. So the winner is to

「そこで」  
スラグホーンは急にきびきびした口調になった。  
「このすばらしい賞をどうやって獲得するか？ さあ、『上級魔法薬』の十ページを開くことだ。あと一時間と少し残っているが、その時間内に、『生ける屍の水薬』にきっちりと取り組んでいただこう。これまで君たちが習ってきた薬よりずっと複雑なことはわかっているから、誰にも完璧な仕上がりは期待していない。しかし、いちばんよくできた者が、この愛すべきフェリックスを獲得する。さあ、始め！」  
それぞれが大鍋を手元に引き寄せる音がして、秤に錘を載せる、コツンコツンという大きな音も聞こえてきた。  
誰も口をきかなかった。  
部屋中が固く集中する気配は、手で触れるかと思うほどだった。  
マルフォイを見ると、「上級魔法薬」を夢中でめくっていた。  
マルフォイが、何としても幸運な日がほしいと思っているのは、一目瞭然だった。  
ハリーも急いで、スラグホーンが貸してくれたボロボロの本を覗き込んだ。  
前の持ち主がページ一杯に書き込みをしていて、余白が本文と同じくらい黒々としているのには閉口した。  
いっそう目を近づけて材料を何とか読み取り（前の持ち主は材料の欄にまでメモを書き込んだり、活字を線で消したりしていた）、必要な物を取りに材料棚に急いだ。  
大急ぎで自分の大鍋に戻るときに、マルフォイが全速力でカノコソウの根を刻んでいるのが見えた。  
全員が、ほかの生徒のやっていることをちらちら盗み見ていた。  
魔法薬学のよい点でも悪い点でもあるが、自分の作業を隠すことは難しかった。  
十分後、あたり全体に青みがかった湯気が立ち込めた。  
言うまでもなく、ハーマイオニーがいちばん進んでいるようだった。  
煎じ薬がすでに、教科書に書かれている理想的な中間段階、「滑らかなクロスグリ色の液

use it on an ordinary day only ... and watch how that ordinary day becomes extraordinary!

“So,” said Slughorn, suddenly brisk, “how are you to win my fabulous prize? Well, by turning to page ten of *Advanced Potion-Making*. We have a little over an hour left to us, which should be time for you to make a decent attempt at the Draught of Living Death. I know it is more complex than anything you have attempted before, and I do not expect a perfect potion from anybody. The person who does best, however, will win little Felix here. Off you go!”

There was a scraping as everyone drew their cauldrons toward them and some loud clunks as people began adding weights to their scales, but nobody spoke. The concentration within the room was almost tangible. Harry saw Malfoy riffling feverishly through his copy of *Advanced Potion-Making*. It could not have been clearer that Malfoy really wanted that lucky day. Harry bent swiftly over the tattered book Slughorn had lent him.

To his annoyance he saw that the previous owner had scribbled all over the pages, so that the margins were as black as the printed portions. Bending low to decipher the ingredients (even here, the previous owner had made annotations and crossed things out) Harry hurried off toward the store cupboard to find what he needed. As he dashed back to his cauldron, he saw Malfoy cutting up valerian roots as fast as he could.

Everyone kept glancing around at what the rest of the class was doing; this was both an advantage and a disadvantage of Potions, that it was hard to keep your work private. Within ten minutes, the whole place was full of bluish steam. Hermione, of course, seemed to have progressed furthest. Her potion already

体」になっていた。

ハリーも根っこを刻み終わり、もう一度本を覗き込んだ。前の所有者のバカバカしい走り書きが邪魔で、教科書の指示が判読しにくいのはまったくイライラさせられた。

この所有者は、なぜか「催眠豆」の切り方の指示に難癖をつけ、別の指示を書き込んでいた。

「銀の小刀の平たい面で砕け。切るより多くの汁が出る」

「先生、僕の祖父のアブラクサス・マルフォイをご存知ですね？」ハリーは目を上げた。スラグホーンがスリザリンのテーブルを通り過ぎるところだった。

「ああ」スラグホーンはマルフォイを見ずに答えた。

「お亡くなりになったと聞いて残念だった。もっとも、もちろん、予期せぬことではなかった。あの歳での龍痘だし……」そしてスラグホーンはそのまま歩き去った。

ハリーはニヤッと笑いながら再び自分の大鍋に屈み込んだ。

マルフォイは、ハリーやザビニと同じような待遇を期待したに違いない。

おそらくスネイプに特別扱いされる癖がついていて、同じような待遇を望んだのかもしれない。

しかし、フェリックス・フェリシスの瓶を獲得するには、マルフォイ自身の才能に頼るしかないようだ。

「催眠豆」はとても刻みにくかった。

ハリーはハーマイオニーを見た。

「君の銀のナイフ、借りてもいいかい？」

ハーマイオニーは自分の薬から目を離さず、イライラと頷いた。

薬はまだ深い紫色をしている。

教科書によれば、もう明るいライラック色になっているはずなのだ。

ハリーは小刀の平たい面で豆を砕いた。

驚いたことに、たちまち、こんな萎びた豆のどこにこれだけの汁があったかと思うほどの汁が出てきた。

急いで全部すくって大鍋に入れると、なんと、薬はたちまち教科書どおりのライラック色に変わった。

resembled the “smooth, black currant-colored liquid” mentioned as the ideal halfway stage.

Having finished chopping his roots, Harry bent low over his book again. It was really very irritating, having to try and decipher the directions under all the stupid scribbles of the previous owner, who for some reason had taken issue with the order to cut up the sopophorous bean and had written in the alternative instruction:

*Crush with flat side of silver dagger,  
releases juice better than cutting.*

“Sir, I think you knew my grandfather, Abraxas Malfoy?”

Harry looked up; Slughorn was just passing the Slytherin table.

“Yes,” said Slughorn, without looking at Malfoy, “I was sorry to hear he had died, although of course it wasn’t unexpected, dragon pox at his age. ...”

And he walked away. Harry bent back over his cauldron, smirking. He could tell that Malfoy had expected to be treated like Harry or Zabini; perhaps even hoped for some preferential treatment of the type he had learned to expect from Snape. It looked as though Malfoy would have to rely on nothing but talent to win the bottle of Felix Felicis.

The sopophorous bean was proving very difficult to cut up. Harry turned to Hermione.

“Can I borrow your silver knife?”

She nodded impatiently, not taking her eyes off her potion, which was still deep purple, though according to the book ought to be

前の所有者を不快に思う気持は、たちまち吹っ飛んだ。

こんどは目を凝らして次の行を読んだ。教科書によると、薬が水のように澄んでくるまで時計と反対回りに攪拌しなければならない。

しかし追加された書き込みでは、七回攪拌するごとに、一回時計回りを加えなければならない。

書き込みは二度目も正しいのだろうか？

ハリーは時計と反対回りに掻き回し、息を止めて、時計回りに一回掻き回した。たちまち効果が現れた。

薬はごく淡いピンク色に変わった。

「どうやったらそうなるの？」

顔を真っ赤にしたハーマイオニーが詰問した。

大鍋からの湯気でハーマイオニーの髪はますます膨れ上がっていた。

しかし、ハーマイオニーの薬は頑としてまだ紫色だった。

「時計回りの攪拌を加えるんだー」

「だめ、だめ。本では時計と反対回りよ！」

ハーマイオニーがピシャリと言った。

ハリーは肩をすくめ、同じやり方を続けた。七回時計と反対、一回時計回り、休み……七回時計と反対、一回時計回り……。

テーブルの向かい側で、ロンが低い声で絶え間なく悪態をついていた。

ロンの薬は液状の甘辛飴のようだった。

ハリーはあたりを見回した。

目の届くかぎり、ハリーの薬のような薄い色になっている薬は一つもない。

ハリーは気持が高揚した。

この地下牢でそんな気分になったことは、これまで一度もない。

「さあ、時間……終了！」スラグホーンが声をかけた。

「攪拌、やめ！」

スラグホーンは大鍋を覗き込みながら、何も言わずに、ときどき薬を掻き回したり、臭いを嗅いだりして、ゆっくりとテーブルを巡った。

ついに、ハリー、ロン、ハーマイオニーとアーニーのテーブルの番が来た。

turning a light shade of lilac by now.

Harry crushed his bean with the flat side of the dagger. To his astonishment, it immediately exuded so much juice he was amazed the shriveled bean could have held it all. Hastily scooping it all into the cauldron he saw, to his surprise, that the potion immediately turned exactly the shade of lilac described by the textbook.

His annoyance with the previous owner vanishing on the spot, Harry now squinted at the next line of instructions. According to the book, he had to stir counterclockwise until the potion turned clear as water. According to the addition the previous owner had made, however, he ought to add a clockwise stir after every seventh counterclockwise stir. Could the old owner be right twice?

Harry stirred counterclockwise, held his breath, and stirred once clockwise. The effect was immediate. The potion turned palest pink.

“How are you doing that?” demanded Hermione, who was red-faced and whose hair was growing bushier and bushier in the fumes from her cauldron; her potion was still resolutely purple.

“Add a clockwise stir —”

“No, no, the book says counterclockwise!” she snapped.

Harry shrugged and continued what he was doing. Seven stirs counterclockwise, one clockwise, pause ... seven stirs counterclockwise, one stir clockwise ...

Across the table, Ron was cursing fluently under his breath; his potion looked like liquid licorice. Harry glanced around. As far as he could see, no one else’s potion had turned as pale as his. He felt elated, something that had

ロンの大鍋のタール状の物質を見て、スラグホーンは気の毒そうな笑いを浮かべ、アーニーの濃紺の調合物は素通りした。

ハーマイオニーの薬には、よしよしと頷いた。

次にハリーのを見たとたん、信じられないという喜びの表情がスラグホーンの顔に広がった。

「紛れもない勝利者だ！」スラグホーンは地下牢中に呼ばわった。

「すばらしい、すばらしい、ハリー！なんと、君は明らかに母親の才能を受け継いでいる。彼女は魔法薬の名人だった。あのリリーは！さあ、さあ、これを——約束のフェリックス・フェリシスの瓶だ。上手に使いなさい！」

ハリーは金色の液体が入った小さな瓶を、内ポケットに滑り込ませた。

妙な気分だった。

スリザリン生の怒った顔を見るのはうれしかったが、ハーマイオニーのがっかりした顔を見ると罪悪感を感じた。ハーマイオニーにはいつも笑っていてもらいたいのだ。

ロンはただ驚いて口もきけない様子だった。

「どうやったんだ？」地下牢を出るとき、ロンが小声で聞いた。

「ラッキーだったんだろう」マルフォイが声の届くところにいたので、ハリーはそう答えた。

しかし、夕食のグリフィンドールの席に落ち着いたときには、ハリーは二人に話しても、もう安全だと思った。

ハリーが一言話を進めるたびに、ハーマイオニーの顔はだんだん石のように固くなった。

「僕が、ずるしたと思ってるんだろ？」ハーマイオニーの表情にイライラしながら、ハリーは話し終えた。

「まあね、正確にはあなた自身の成果だとは言えないでしょ？」

ハーマイオニーが固い表情のままで言った。

「僕たちとは違うやり方に従っただけじゃないか」ロンが言った。

「大失敗になったかもしれないだろ？ だけどその危険を冒した。そしてその見返りがあった」ロンはため息をついた。

certainly never happened before in this dungeon.

“And time’s ... up!” called Slughorn. “Stop stirring, please!”

Slughorn moved slowly among the tables, peering into cauldrons. He made no comment, but occasionally gave the potions a stir or a sniff. At last he reached the table where Harry, Ron, Hermione, and Ernie were sitting. He smiled ruefully at the tarlike substance in Ron’s cauldron. He passed over Ernie’s navy concoction. Hermione’s potion he gave an approving nod. Then he saw Harry’s, and a look of incredulous delight spread over his face.

“The clear winner!” he cried to the dungeon. “Excellent, excellent, Harry! Good lord, it’s clear you’ve inherited your mother’s talent. She was a dab hand at Potions, Lily was! Here you are, then, here you are — one bottle of Felix Felicis, as promised, and use it well!”

Harry slipped the tiny bottle of golden liquid into his inner pocket, feeling an odd combination of delight at the furious looks on the Slytherins’ faces and guilt at the disappointed expression on Hermione’s. Ron looked simply dumbfounded.

“How did you do that?” he whispered to Harry as they left the dungeon.

“Got lucky, I suppose,” said Harry, because Malfoy was within earshot.

Once they were securely ensconced at the Gryffindor table for dinner, however, he felt safe enough to tell them. Hermione’s face became stonier with every word he uttered.

“I s’pose you think I cheated?” he finished, aggravated by her expression.

「スラグホーンは僕にその本を渡してたかもしれないのに、はずれだったなあ。僕の本には誰も何にも書き込みしてなかった。ゲロしてた。五十二ページの感じでは。だけどー」

「ちょっと待ってちょうだい」

ハリーの左耳の近くで声がすると同時に、突然ハリーは、スラグホーンの地下牢で嗅いだあの花のような香りが漂ってくるのを感じた。

見回すとジニーがそばに来ていた。

「聞き違いじゃないでしょうね？ ハリー、あなた、誰かが書き込んだ本の命令に従っていたの？」

ジニーは動揺し、怒っていた。

何を考えているのか、ハリーにはすぐわかった。

「何でもないよ」ハリーは低い声で、安心させるように言った。

「あれとは違うんだ、ほら、リドルの日記とは。誰かが書き込みをした古い教科書にすぎないんだから」

「でも、あなたは、書いてあることに従ったんでしょう？」

「余白に書いてあったヒントを、いくつか試してみただけだよ。ほんと、ジニー、何にも変なことは——」

「ジニーの言うとおりだわ」ハーマイオニーがたちまち活気づいた。

「その本におかしなところがないかどうか、調べてみる必要があるわ。だって、いろいろ変な指示があるし。もしかしたらってこともあるでしょ？」

「おい！」

ハーマイオニーがハリーのカバンから「上級魔法薬」の本を取り出し、杖を上げたので、ハリーは憤慨した。

「スペシアリス・レベリオ！＜化けの皮剥がれよ＞」

ハーマイオニーは表紙をすばやくコツコツ叩きながら唱えた。

何にも、いっさい何にも起こらなかった。

教科書はおとなしく横たわっていた。

古くて汚くて、ページの角が折れているだけの本だった。

“Well, it wasn’t exactly your own work, was it?” she said stiffly.

“He only followed different instructions to ours,” said Ron. “Could’ve been a catastrophe, couldn’t it? But he took a risk and it paid off.” He heaved a sigh. “Slughorn could’ve handed me that book, but no, I get the one no one’s ever written on. *Puked* on, by the look of page fifty-two, but —”

“Hang on,” said a voice close by Harry’s left ear and he caught a sudden waft of that flowery smell he had picked up in Slughorn’s dungeon. He looked around and saw that Ginny had joined them. “Did I hear right? You’ve been taking orders from something someone wrote in a book, Harry?”

She looked alarmed and angry. Harry knew what was on her mind at once.

“It’s nothing,” he said reassuringly, lowering his voice. “It’s not like, you know, Riddle’s diary. It’s just an old textbook someone’s scribbled on.”

“But you’re doing what it says?”

“I just tried a few of the tips written in the margins, honestly, Ginny, there’s nothing funny —”

“Ginny’s got a point,” said Hermione, perking up at once. “We ought to check that there’s nothing odd about it. I mean, all these funny instructions, who knows?”

“Hey!” said Harry indignantly, as she pulled his copy of *Advanced Potion-Making* out of his bag and raised her wand.

“*Specialis Revelio!*” she said, rapping it smartly on the front cover.

Nothing whatsoever happened. The book simply lay there, looking old and dirty and

「終わったかい？」ハリーがイライラしながら言った。

「それとも、二、三回とんぼ返りするかどうか、様子を見ているかい？」

「大丈夫そうだわ」

ハーマイオニーはまだ疑わしげに本を見つめていた。

「つまり、見かけはたしかに……ただの教科書」

「よかった。それじゃ返してもらおうよ」

ハリーはパッとテーブルから本を取り上げたが、手が滑って床に落ち、本が開いた。

ほかには誰も見ていなかった。

ハリーは屈んで本を拾ったが、その拍子に、裏表紙の下の方に何か書いてあるのが見えた。

小さな読みにくい手書き文字だ。

いまはハリーの寝室のトランクの中に、ソックスに包んで安全に隠してある、あのフェリックス・フェリシスの瓶を獲得させてくれた指示書きと同じ筆跡だった。

半純血のプリンス蔵書

dog-eared.

“Finished?” said Harry irritably. “Or d’you want to wait and see if it does a few backflips?”

“It seems all right,” said Hermione, still staring at the book suspiciously. “I mean, it really does seem to be ... just a textbook.”

“Good. Then I’ll have it back,” said Harry, snatching it off the table, but it slipped from his hand and landed open on the floor.

Nobody else was looking. Harry bent low to retrieve the book, and as he did so, he saw something scribbled along the bottom of the back cover in the same small, cramped handwriting as the instructions that had won him his bottle of Felix Felicis, now safely hidden inside a pair of socks in his trunk upstairs.

*This Book is the Property of the Half-Blood Prince.*